日本人の宗教心や社会的習性でも同様のことがあり、随分誤解を招いています。

日本に仏教を積極的に導入した最初の宗教家は、聖徳太子ですが、日本のトップの天皇は、神道の祭主ですから、一神教的な考えでは、仏教を採用できない。そこで太子が教えたのは、神仏一体、王法一如、両者は矛盾しない。神が仏を守り、仏が神の姿であらわれるという思想で、これは後に聖武天皇の奈良大仏は伊勢の天照大神だという信仰になって来ます。この奈良大仏の建造を助けたのが、八幡様ですが、当時八幡神社は九州にしかなかったのが、これを契機に全国津々浦々に八幡宮ができたわけで、この神仏一体は、明治維新まで千年以上続くわけで、維新後神仏分離令が出ましたが、5年も経たないうちにもとの黙阿弥です。日本の人民から見れば、そんな無理して分離する必要はない。一神教でないからといって信仰心が薄いわけでも、無節操なわけでもないのです。日本人は万神霊信仰で、一木一草皆神です。道端の道標も沢山の人を導いてくれ、見る人の心をなごませてくれる存在ですから、粗末には扱えません。万神霊信仰には殆ど教義はありませんから、バハイの教えとも矛盾しません。

日本仏教にも親鸞の一向一揆や日蓮の法華一揆のような一神教的な宗教があって、時の権力者を困らせましたが、神道の元祖である天皇にはたてつきませんでした。天皇不親政の秘密はどうやらこのへんにあるのではないでしょうか。

ところで、平和は以上の文化の多様性を承認し、相手を理解できる和合が前提で、自分が攻撃しないことを誓ったり、相手が攻撃してこないことを祈ったりしているだけではだめで、相手の理解を通じて、積極的に人類の一体性を説得できなければなりません。それを可能にするためには、相手のトラウマを除いたり、信頼を築き上げる対話法の研究も必要です。

武士道(日本の魂)と日本の伝統的道徳教育

尊田望

抄録

新渡戸稲造の『武士道』は、西洋人の妻や同僚がしばしば提示した日本文化に関する質問への返答として1900年に書かれた。この著作で、新渡戸は「サムライ」に施される教育こそが日本の伝統的な道徳教育であると断言している。この本では、日本人の代表的な「美徳」をいくつかあげられ、解説されている。興味深いことに、故大業の翼成者ルヒア・ハヌームは、1970年代に日本を訪問した際に観察した日本人の美徳を多数上げて賞賛している。この研究では、新渡戸が説明している日本人の美徳と道徳教育を、バハイの美徳と道徳教育観と比較対照する。

背景

「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である」

武士道は、何百年という長い日本の歴史の中で、武士の生き方として自発的に醸成され発達を遂げたものである。したがって、明確な時と場所を指して、「ここに武士道の源泉がある」などとは言えない。武士道の起源は封建制の時代の中で自然に自覚された。ヨーロッパで、封建制の始まりとともに職業的騎士階級が必然的に台頭してきたように、日本でも又、鎌倉時代ころに武士階級が生じた。新渡戸稲造の『武士道』は、西洋人の妻や同僚がしばしば提示した疑問への返答として1900年に書かれた。この著作で、新渡戸は「サムライ」に教え込まれる日本の伝統的な道徳教育について雄弁に語っており、日本人の代表的な「美徳」をいくつかあげ、それぞれについて解説している。興味深いことに、バハイ大業の

翼成者、故ルヒア・ハヌームは、1970年代に日本を訪問した際に観察した日本人の美徳を多数上げて賞賛している。そこで、この研究では、新渡戸が説明している日本人の美徳と道徳教育を分析し、バハイの美徳と道徳教育観と比較対照してみる。

新渡戸稲造

新渡戸稲造は1862年、岩手県盛岡市に生まれ、東京外国語学校、札幌農学校を経てジョンズホプキンス大学、ドイツのボン大学に留学した。1891年、米国人メリー・エルキントンと結婚し、帰国後、札幌農学校教授に就任する。1900年に英文の「武士道」を出版した後、パリ万博審査員、京都帝国大学教授、東京帝国大学教授、東京女子大学学長などを歴任するとともに、国際連盟事務次長、貴族院議員なども務めた。1933年、カナダ、バンフでの第5回太平洋会議に出席中、ビクトリアにて客死した。

新渡戸は、10代後半でキリスト教の洗礼を受け、日本と西洋を結ぶ「太平洋の橋になる」決心をする。20代中盤、ジョンズホプキンス大学に留学中、クエーカー教会に通い、同じクエーカー教徒のメリー・エルキントンに出会い、後に結婚した。1891年、29歳の時であった。

新渡戸は、明治・大正にかけての教育、特に女性の教育に多大な貢献をした。また、国際連盟の事務次長、知的協力国際委員会（現ユネスコ）の世話役なども歴任して、国際社会にも大きく貢献 したが、新渡戸が活動した時代、日本は戦争への道をひた走っていた。このような国際人の存在は当時の軍部にはあまり嬉しくなかったようであるが、ようやく最近になって、5000円札の肖像に登場した、この明治の教育家を社会は再評価して、その功績を讃える時が来ているようである。

「武士道」

新渡戸は1899年、英語版で「武士道」を発行した。日本語訳版は桜井によるもので、1909年に発行された。後に矢内原忠雄が改訳版を発行している。この矢内原は、新渡戸が第一高等学校(東京)校長時の教え子であり、内村鑑三の弟子でもある。代わって内村は札幌農学校（北大農学部の前身） で新渡戸と同級生であり、二人とも、W・クラークの「イエスを信ずる者の契約」 に署名している。この三名が、キリスト教を背景とする明治時代の代表的な思想家であることは、非常に興味深い。この点については後で取り上げる。

「武士道」の源泉

仏教

「武士道」の源泉としてまずあげられるのが、仏教である。仏教は、インドから中国、朝鮮を経て日本に伝えられ、運命に任す平静なる感覚、不可避に対する服従、危険災禍に直面してのストイック的な沈着を説き、生を賤しみ死を親しむ心を育んだ。特に影響を及ぼしたと考えられるのが、「禅」であり、ラフカデイオ・ハーンによると、禅とは「言語による表現の範囲を超えたる思想の領域に、瞑想をもってたっせんとする人間の努力」と定義される。

神道

代わって、神道は日本独自の宗教であり、「愛国心」、「忠義」、「服従性」を強調し、主君に対する忠誠、祖先に対する尊敬、親に対する孝行を説いた。神道では、キリスト教思想に見られる、「原罪」の教義がなく、むしろ、人の心は本来善にして神のごとく清浄なるものと考えている。つまり、人の心を神託の述べられる至聖所として崇め尊んでいるのである。実際、神社奥殿にある鏡は人の心を表す象徴であり、平静かつ明瞭なる時は神の御姿を映すとされる。

儒教

次にあげられるのが儒教であり、これは、孔子の説いた中国の代表的な思想である。これは武士の倫理の源泉であり、君臣、父子、夫婦、長幼、および朋友間における五倫の道を説き、貴族保守的な政治道徳を掲げた。また、同情心を尊んだ。孔孟の書は青少年の主なる教科書とされ、大人の間の議論の最高権威と見なされた。ただし、「論語読みの論語知らず」という戒めにもあるように、行動の伴わない知

識を嘲った。つまり、知行合一を良しとしたのである。また、儒教の流れを汲む王陽明と新約聖書には共通点があり、「まず神の国と神の義とを求めよ、さらばすべてこれらの物は汝らに加えらるべし」という聖書の言葉にあるように、まずは心の豊かさを得ることを強調した。

武士道における徳

「君子はまず徳を慎む、徳有ればこれ人有り、人有ればこれ土有り、土有ればこれ財有り、財有ればこれ用あり、徳は本也、利は末也」(孔子)(「武士道」、p.49) とあるように、「徳」こそは全ての基盤であるとされる。そこで、次に武士道における主な「徳」を分析してみたい。新渡戸の「武士道」で取り上げられている代表的な徳は、義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義・克己である。

義

義こそはもっとも厳格なる教訓であり、確固とした決断力を意味する。「義は勇の相手にて裁断の心なり。道理に任せて決心して猶予せざる心をいうなり。死すべき場合に死し、討つべき場合に討つことなり」(林子平) (同上、p.39)。新渡戸は、この義をキリスト教の「愛」と関連させながら、こう述べている――「我々の行為 [の]・・・唯一の動機は愛であるべきであるが、それの欠けたる場合、孝を命ずるために・・・この権威を義理において構成した」(同上、p.41)、「愛が徳行を刺激するほど強烈に働かない場合には、人は知性に助けを求めねばならない」(同上、p.41)、「義理は道徳における第二義的の力」、「義理は正義の道理として出発したがしばしば決疑論に屈服した」(同上、pp.41-42)。つまり、新渡戸にとって最高の徳とは、最終的には「愛」であるが、愛が欠けている時、それは「義」において武士の務めが果たされると考えたのである。そして、「義」は「勇」の支えがあって、最高の力を発揮すると述べている――「鋭敏にして正しき勇気感、敢為堅忍の精神が武士道になかったならば、義理はたやすく卑怯者の巣と化したであろう」(同上、p.42)。

勇:敢為堅忍

新渡戸は、「勇気は、義のために行われるのでなければ、徳の中に数えられるにほとんど値しない」(同上、p.43)そして、「義を見てなさざるは勇なきなり」(論語) (同上、p.43)と述べており、「義」と「勇」が互いに補い合い、支えあう関係にあることを示している。また、上杉謙信と武田信玄、ブルータスとアントニウス/オクタヴィウスといった例を挙げて、「勇と名誉とは等しく、平時において友たるに値する者のみを、戦時における敵としてもつべきことを要求する。勇がこの高さに達した時、それは仁に近づく」(同上、pp.47-48)と述べている。「ローマ人は金を持って戦わず、鉄を持って戦う」(同上、p.47)、「汝の敵を誇りとすべし、しからば敵の成功はまた汝の成功なり」(ニーチェ、同上、p.47)とあるように、戦いは義のためであり、欲のためではない。同じく、戦いにおける敵は憎むべき敵ではなく、敬意を持って戦わねばならず、時には真の友となることさえありうる。さらに新渡戸は、剛毅・不撓不屈・大胆・自若・勇気といった特質は、(武士の) 少年に最も人気ある徳であり、青少年の人格形成に大きな影響を及ぼした徳であった。

仁:惻隠の心

「愛、寛容、愛情、同情、憐憫は古来最高の徳として・・・認められた」(同上、p.49)とあるように、「仁」は「王者の徳」と見なされた。「仁は柔和なる徳であって、母のごとくである。真直なる道義と厳格なる正義とが特に男性的であるとすれば、慈愛は女性的な柔和さと説得性とをもつ」(同上、p.52)。このように仁は、義・勇といった男性的な徳とのバランスを取る、対照的な特質である。ここに、正義と道義と愛のバランスが見られる。武士の訓練では、優雅の風、優美なる感情を涵養するため、詩歌 (音楽・文学)が奨励された。

礼

「他人の感情を尊敬することから生ずる謙譲・慇懃の心は礼の根本を成す」(同上、p.57)。礼も、日本の心を表す代表的な徳であるが、新渡戸は、真の礼は表面的でへつらい的なものではなく、他者への

思いやりから生じるものであることを強調している――「作法の慇懃鄭重は日本人の著しき特性として、外国人観光者の注意を惹くところである。もし単に良き趣味を害うことを怖れてなされるに過ぎざる時は、礼儀は貧弱なる徳である。真の礼はこれに反し、他人の感情に対する同情的思いやりの外に現れたものである。それはまた正当なる事物に対する正当なる尊敬・・・を意味する」(同上、p.58)。ここで、新渡戸は、日本人の礼儀と西洋人のそれとを、興味深く対照させて、日本の礼儀の真の意図をうまく説明している。つまり、西洋人は、客への贈り物をすばらしいものとして提示するのに対し、日本人はつまらないものとして紹介する。新渡戸は、このふたつの違いは単なる視点の違いによるもので、究極的に同じ礼儀の精神を表していると説明している。すなわち、西洋人は、「これは善い贈り物です。善いものでなければ、私はあえてこれを君に贈りません。善き物以外を君に贈るのは侮辱ですから」と考え、日本人は、「君は善い方です、いかなる善き物も君にはふさわしくありません・・・この品物をば物自身の価値のゆえにでなく、記しとして受け取ってください」と考えるのであり、相手への敬意、礼儀から生じたものである。その精神は同じであり、表現の仕方が、文化的な要因から異なってしまっただけなのである。

誠

前述の礼儀を真の礼儀となし、実質的なものとするのが「誠」である。新渡戸は「信実と誠実となくしては、礼儀は茶番であり芝居である」(同上、p.65)と述べており、伊達政宗も「礼に過ぐれば諂(へつら)いとなる」、孔子は「誠は物の終始なり、誠ならざれば物なし」と述べている。いわゆる「真心」のこもった言動が、人の心をつかみ、動かすのである。現代のサービス業でもこの精神はいまだ生きており、真心のこもったサービスを提供する店はやはり、繁盛するのである。

名誉

「事実において、正直の観念は名誉と不可分に混和」しており、「名誉の感覚は人格の尊厳ならびに価値の明白なる自覚を含む」(同上、p.72)、そして「人自身の不死の部分、これなくんば人は禽獣である。」廉恥心は少年教育の最初の徳のひとつで、「笑われるぞ」、「体面を汚すぞ」、「恥ずかしくないか」といった表現は、最後の訴えとしてよく使われていた。「不名誉は樹の切り傷のごとく、時はこれを消さず、かえってそれを大ならしむるのみ」(新井白石)。「恥はすべての徳、善き風儀ならびに善き道徳の土壌である」(カーライル)。武士は、この名誉(裏を返せば恥をしのぐこと)のためにいさぎよく自分の命を絶つこと(=切腹)も辞さなかったのであるが、現代では辞職、極端な場合は首吊り自殺などに現われることがある。しかし、現代では一歩進んで、辞職するよりはまず責任を全うすることの方が正しい選択の時もあるのではなかろうか。

忠義

「いかなる生命をこれがため犠牲にするとも高価なるに過ぎずとせられし事由の中に、忠義があった」(同上、p.77)。目上の者に対する服従および忠誠は截然として封建道徳の特色を成す。人格的忠誠はあらゆる種類および境遇の人々の間に存在する道徳的結びつきである。「忠誠が至高の重要性を得たのは武士的名誉の掟においてのみ」(同上、p.78)であり、「生命はこれをもって主君につかうべき手段なりと考えられ、しかしてその理想は名誉に置かれた。したがって武士の教育ならびに訓練の全体はこれに基づいて行われた」(同上、p.85)。

克己

「喜怒色に現さず」。武士が感情を表にあらわすは男らしくない。父が子を抱くは彼の威厳を傷つける。他人の面前にて夫は妻に接吻しない。戦いの場に出る者にとって、この特質は、重要なことであったかもしれない。しかし、現代社会では、まったく感情を表さないことは、相互理解にも支障をきたすことがあるし、特に国際社会ではなおさらそうである。自己統制力は普遍的に尊ばれる徳であるが、喜怒哀楽がまったく感じられないのは、困ったものである。特に、子どもの教育という意味では、効果的ではないように思われる。人間性の弱さが最もきびしい試練に会う時、常に笑顔を作る傾きがある。克己の修行はその度を過ごしやすい。

武士の教育および訓練

武士の教育での第一の点は品性を建てることで、思慮・知識・弁論等知的才能は重んぜられなかった。また美的なたしなみも付属的であり、「知」よりも「叡智」が尊ばれ、行動の人が優れているとされた。武士道の骨組みとは智仁勇であり、哲学と文学が知育の主要部分を成した。文学は消閑の娯楽、哲学は軍事的・政治的問題の解明、品性確立の援助として説かれた。

その他、撃剣、弓術、柔術（柔ら）、馬術、槍術、兵法、書道、倫理、文学、歴史などがそれぞれ、いわゆるカリキュラムの一角をなしていた。特に、書道は日本語文字が絵画の性質を帯びていることから、芸術的価値を有した。したがって筆跡は人の人格を表すとさえも言われた。

柔術は筋力に依存せず、武器を要しない。敵の身体の一部をつかみ、あるいは麻痺させる技であり、目的は殺すことではなく、一時的に不能にすることであった。いたずらに命を奪わず、とりあえず戦に勝つために必要な最小限のことを成し遂げる手段であったようだ。

武士道は非経済的で、貧困を誇る。封建時代の戦争は科学的精確さに欠けており、数学的観念は養成しなかった。金銭と金銭欲とをつとめて無視したため、武士道は金銭に基づく無数の弊害から解放されていた。

また、数学の知的訓練の代わりに、文学的解釈と倫理的討論がなされていた。ベーコンは、学問の三つの効用として快楽、装飾、能力をあげたが、武士道は「能力」を重視した。「学んで思わざればすなわち暗し、思うて学ばざればすなわち惑う」と「論語」にあるように、「知識でなく品性が、頭脳でなく霊魂が琢磨啓発の素材として選ばれる時、教師の職業は神聖なる性質を帯びる」（同上、p.89）のである。このように、武士道の真髄は、道徳教育にあった。「我を生みしは父母である。我を人たらしむるは師である」と孔子も述べているように、真の「師」とは精神を育み、魂を鍛え、人格を形成するのを導いてくれる者を意味していた。

さらに、新渡戸はこう述べている――「あらゆる種類の仕事に対し報酬を与える現代の制度は、武士道の信奉者の間には行われなかった。金銭なく価格なくしてのみなされうる仕事のあることを、武士道は信じた。僧侶の仕事にせよ教師の仕事にせよ、霊的の勤労は金銀をもって支払われるべきでなかった」（同上、pp.89-90）。つまり、「教育においてなされる最善の仕事――すなわち霊魂の啓発（僧侶の仕事を含む）は、具体的、把握的、量定的ではない。量定しえざるものであるから、価値の外見的尺度たる貨幣を用うるに適しないのである」（同上、p.90）。「彼ら（師）はすべての学問の目的と考えられしものの具体化であり、かくして鍛錬中の鍛錬として普く武士に要求せられたる克己の生きたる模範であった」（同上、p.90）。武士道の世界では師の施す訓練は、この世の尺度で評価できるものではなかったのであり、物質的な利害から隔離されていたからこそ、その純粋性と高尚さを長い間保てたのであろう。

婦人の教育および地位

武士道は、基本的に男性を対象としたものであるため、そこで尊ばれる徳や特質も、基本的には男性的なものであった。その武士道の解説で、新渡戸が婦人の教育と地位について語っていることは非常に興味深い。女性の理想は、著しく家庭的な性質を帯びていたが、同時に勇婦的な特性も尊ばれた。この二つは対照的であるが、勇婦的な特性は、自分の身を敵から守るということと、家族（つまりは子ども）を守るという二つの目的のために養われた。したがって、婦人も長刀（なぎなた）を持ち、武道に励んだのである。

婦人は自己否定を幼少より教わり、父・夫・子のために自己を犠牲にすることを学び、これが女子の家庭性の基調となった。心を清めるために音楽や舞踊をたしなんだ。奉仕とは「己より高き目的に仕えること」を意味し、夫が「主」に仕えているように、婦人は父・夫・子のために身を尽くした。また、結婚は男女の一体化を意味し、互いを蔑むことはしない。しかし、西洋の習慣とは反対に自分の妻を低く他者に紹介することは、女性の虐待ではないと新渡戸は主張している。むしろ、日本では自己賞賛は悪趣味とされるので、自分と一体化された妻を賞賛することも悪趣味になる、したがって妻を褒めることをしないのである。

美徳の修得

武士道とバハイを比較して、まず共通点として言えることは、両方とも美徳の修得を強調していることである。ただし、武士道は基本的に武家社会における男性の美徳を目標としているため、人類全体としての美徳教育として不十分である。簡潔に言えば、非常にストイクであるということである。イスラム教のコーランでは神の名称（すなわち神の属性･美徳）が 99 出てくるし、バハイの聖典でもおびただしい数の神の名称･美徳が出てくる。自身バハイであり子どもと家族のための美徳教育者であるリンダ・ポポフは 50 以上の美徳をあげている。バハイの代表的な美徳には次のようなものがあげられよう。

> いたわり、清潔、共感、自信、思いやり、協力、勇気、礼儀、創造性、離脱、決意、勤勉、識別、熱意、優秀、柔軟性、許し、友好、寛大、優しさ、手伝い、正直、名誉、謙遜、理想、誠実、喜び、正義、親切、愛、忠誠、節度、慎み、秩序正しさ、忍耐、平穏、粘り強さ、目的意識、敬意、責任、自制心、奉仕、機転、感謝、寛容、信頼性、真実性、理解、和、知識、英知、雄弁、発言、意見を明確に伝えること、協議、探求、美、壮大、光、慈悲、強大、意思、高遠、高尚、黙従、忠誠心、従順性、確固不動、祈り深さ

これらの中でもまずは、いたわり・優しさ・慎みといった女性的な美徳といったものが、武士道にはまったくとは言わずとも比較的欠けている。実際、アブドル・バハは、この新しい時代において、人類はより女性的な美徳を身につけるようになるであろうと述べている。

> 過去の時代は力で支配された。そして男子は心身ともに女子よりも強く攻撃的であるという理由で女子の上に支配権を持っていた。しかしその均衡はすでに変化しつつある。腕力はその勢力を失い、むしろ女子の長所である知的注意力や直感、愛や奉仕などの精神的特質が勢力を得つつある。それゆえ、新時代は男性的な性質が減り、女性的な理想が浸透するであろう。より正確に言えば、文明の男性的な要素と女性的な要素がより均等に調和される時代となるであろう。(「バハオラと新時代」に引用、p.172、訳改訂—著者)

われわれは男性も含めて、女性的な特質をもっと修得し、人類全体としてよりバランスの取れた美徳を養っていかなくてはならないのである。この他、バハイでは「発言」、「雄弁」、「意見を明確に伝えること」、「協議」など自らの見解や思考を明確に表現することも求められており、腕力ではなく、言葉の力で問題解決をすることが求められている。明らかに武士の時代は終わったのである。

美徳の源泉

「義」は武士道でも最も厳格な教訓であるが、バハオラも正義こそは「わが目に最愛なるもの」と述べており、高く位置づけされている。しかし、最大の違いは、何をして正義となすかという天秤、秤である。武士にとってそれは自らが仕える「主」（領主、殿）であるが、バハイにとってそれは神であり、それは神が遣わされる顕示者の示す教えである。

> おお心霊の子よ！総てのもののうち、わが目に最愛なるものは正義である・・・その助けにより、汝、他人の眼(まなこ)ならぬ汝自らの眼(まなこ)にて見、隣人の理解力ならぬ汝自らの理解力にて知らん・・・まことに正義こそは、わが汝への贈り物であり、わが慈愛のしるしである。(「かくされたる言葉」、アラビア編、3)

> われが汝のために啓示した全てのものの真髄は正義である。そしてそれは探究心を持ってあらゆることを調べ、空想や模倣から解放され、神がなさった輝かしい行いを一体性の心眼で見ることである。(『叡智の言葉』、「バハオラの書簡：『ケタベ・アグダス』後に啓示（上）より」)

その他、「勇気」、「愛」、「慈悲心」、「礼儀」、「誠実」、「栄光」などの美徳も同じく、バハイで高く評価されているが、それらの源泉はやはり神にある。

勇気と力の源は、神の言葉を広め、神の愛において不動なることである。（『叡智の言葉』、同上）

愛の真髄とは、主がお望みになることのみを求め、神以外のすべてから超脱し、『最愛なる御方』の方へ心を向けることである。(『叡智の言葉』、同上)

慈悲心の真髄とは、神の祝福を詳述し、常に、そしてあらゆる状況下において、神に感謝することである。(『叡智の言葉』、同上)

おお神の民よ！われは、礼儀正しくあるよう汝らに勧告する。なぜなら、それは他の全てに勝って、美徳の中の王子なのであるから。礼儀正しさの光によって明るくされ、正直の衣を着せられた者は幸いである。礼儀正しさを授けられた者はみな、まことに、崇高な地位に達したのである。この虐げられた者や、その他あらゆる者がそれを得ることを可能にされ、それを固守し、それに視線を固定さすことが望まれている。(『世界の書簡』、「バハオラの書簡：『ケタベ・アグダス』後に啓示（上）より」)

この頃、正直や誠実は、偽りの支配によって苦しめられ、正義は不正の鞭により苦しめられている。あらゆる方向に兵士の連隊だけが見られ、あらゆる地に剣の衝突の音しか聞こえないほど、堕落の煙は世界を覆（おお）ってしまった。世界を復帰させ平静を国々にもたらし、神の権力を行使する者らを強化して下さるよう、われは「真なる御方」なる神に嘆願する。(『タラザト』、五番目の飾り、「バハオラの書簡：『ケタベ・アグダス』後に啓示（上）より」)

栄光の源とは、神が授け給うものをすべて受け入れ、神が定め給うことに満足することである。(『叡智の言葉』、「バハオラの書簡：『ケタベ・アグダス』後に啓示（上）より」)

人間の栄光はその知識や正直な行動、立派な人格や英知にあり、国籍や地位にあるのではない。おお地上の人々よ！この天の言葉の価値を理解せよ。まことにそれは、知識の海に浮かぶ船、そして知覚の領域での輝く発光体にたとえることができよう。(『楽園の言葉』、第7の葉、「バハオラの書簡：『ケタベ・アグダス』後に啓示（上）より」)

このように、バハイにとって美徳の源泉は神にあるのである。実際、バハオラは、神は人間を愛し、創造された時に、その神の属性を潜在的に人間の魂に吹き込んだ、と述べている。

おお人の子よ！われ汝の創造を愛した。さればこそ、われ汝を創った。されば汝、われを愛せよ。われ汝の名を呼び、汝の魂を、生命の生気もて満たし得んがために。(「かくされたる言葉」、アラビア編、4)

聖書でも神は「われわれに似せて人を創ろう」と書いてあるように、この創造は、神の属性を潜在的に授けるという意味なのである。そして、われわれ人間のなすべき義務はその潜在する神の特質を現していくことである。アブドル・バハもずばり、人生の目的は「美徳を得ることである」と述べている(「パリ講和集」、p.251)。

武士道が国民全体に及ぼした影響

武士は国民の「花」であり、「根」であり、天からの善き賜物は武士を通して流れた。道義の標準を立て、自己の模範にて指導した。対内的教訓としては、徳のために徳を行うことを強調する純粋道徳であり、対外的教訓としては、社会の安寧幸福を求める福利主義であった。それゆえ、芝居・寄席・講釈・浄瑠璃・小説の大部分は、主題が武士の物語から取られた（例：義経と弁慶、信長、秀吉、家康、桃太郎鬼が島征伐など）。

「花は桜木、人は武士」と言われるように、大衆の間に酵母として作用し、全人民に対する道徳的標準を供給した。武士道は当初、選良（エリート）の光栄として始まったが、時が経るにつれ国民全般の渇仰および霊感となっていった。平民は武士の道徳的高さにまでは達し得なかったが、「大和魂」は島帝国の民族精神を表現するにいたった。

「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」(本居宣長)という詩にもあるように、武士道はしばし、日本固有の花である桜にたとえられた。桜には高雅優麗なる美があり、その美は単純で、美の下に刃を

も毒をも隠すことなく、色は華麗ならず、香りは甘く、香気は浮動し、天に昇り、朝日が差して香りが匂う時、清澄爽快の感覚を催す。同じく武士道も単純であり、美しく、高雅ではあるが華麗すぎず、清澄爽快の気分を周りに与えたのである。

武士道の将来

しかしその武士道も、時代の流れには勝てなかった。ヨーロッパでは騎士道は封建制度から離れた時、キリスト教会が養い役となり、寿命を延ばしたが、日本には武士道を養育するほどの大宗教に欠けていたため、存続が断たれたのである。つまり、現代の戦争は武士道と趣が異なり、技術的についていけなかった。また、武士道を支えていた神道自体が老いてしまい、儒教は西洋の知的哲学に取って代わられた、仏教も形式的な宗教になってしまった。

新渡戸は、武士道こそが明治維新以後の大変貌の動力であり、単に物質資源の開発・富の増加を求め、西洋習慣の盲目的模倣をしたのではなかった（「武士道」、p.136）と述べている。すなわち、劣等国と見下ろされることを忍びえず、名誉の感覚が最も強い動機だったのである。さらに、殖産興業的な考慮は後に目覚めたものであるとつけ加えている。

しかし明治維新がおこり、形式としての武士道は終焉を告げる（映画「ラスト・サムライ」参照）。しかし、その根底にある精神の炎は、くすぶりながらも残っていた。実際、「封建日本の道徳体系はその城郭と同様崩壊して塵土に帰し、しかして新道徳が新日本の進路を導かんがため不死鳥のごとくに起こる、と預言する者があった」（「武士道」、p.147）と新渡戸が述べているように、武士道に具現化されていた道徳の精神そのものが消え失せることはないと信じていたのである。

キリスト教

形としての武士道が消え行く中、その台頭としての道徳体系として可能性があったのは、キリスト教であろう。前述のとおり、新渡戸自身もキリスト者であり、かつての旧友内村鑑三、「武士道」の邦訳にも携わった矢内原忠雄もキリスト者であり、明治・大正時代前後を代表する教育者たちである。実際、新渡戸はこう述べている――「キリスト教と唯物主義・・・は世界を二分するであろう。小なる道徳体系はいずれかの側に与（くみ）して自己の存続を計るであろう。武士道はいずれの側にくみするであろうか」（同上、p.149）。しかし、キリスト教の伝道の失敗について新渡戸は嘆き、その原因について次のように鋭く分析・指摘している：

> 「わが国におけるキリスト教伝道事業失敗の一原因は、宣教師の大半がわが国の歴史について全く無知なることにある」（同上、p.140）。
>
> 「・・・もし理解しうる言葉を持って提供せらるるならば、すなわち一国民がその道徳的発達上熟知する語彙をもって表現せらるるならば、人種もしくは民族のいかんを問わず、その心にたやすく宿りうるものである」（同上、p.140）。
>
> 「新信仰の宣伝者たる者は幹、根、枝を全部根こそぎして、福音の趣旨を荒地に播くことをなすべきであるか？・・・否、それはイエス御自身が地上に彼の王国を建つるにおいて決して採用したわざるべき方法である」（同上、p.140）。

すなわち、まずは宣教師たちの多くが日本の歴史について無知であったこと、次に国民が理解しうる言葉や語彙で表現できなかったこと、そして国の文化や思想を根こそぎ変えてしまおうという態度、これらが原因であったということである。

バハイ信教では、異国の地でバハイを伝える時に留意すべき心構えがいくつかある。そのひとつは、その国の歴史や文化、言語や習慣などをよく学ぶことである。そしてその国の人たちが使う用語を用いて語ること。もちろん、できる限りその国の言語そのものを学んで、彼らの言語で話せれば理想的である。さらに、自分のことではなく、その国の人々の真の幸福のために伝えなくてはならず、それは、必ずしも物質的な繁栄だけではなく、究極的には精神的な幸福である。

バハイは強制的な改宗活動は一切禁止されている。いやむしろ、共に真理を探究し、見つけていこうという謙虚な態度で教えを伝えなくてはならない。

> この栄光ある律法時代の神の教えに応じて，われわれは誰をもけなしたりせず，また，『あなたは知っていないが，私は知っている』と言って人を無知と呼んだりすべきではない。むしろ，われわれは他人に敬意を払い，説明や実証を試みるときは『私たちの前にこれらのものがある。どこから，どの様な形態で真実が見つけられるか決めるために探求しようではないか』と言って，あたかも真理を探求しているかのように話すべきである。
>
> 教える者は、自分に教養があり、他人は無知であると見なしたりすべきではない。その様な考えはうぬぼれを生じ、うぬぼれは感化力のためにならない。教える者は自分自身を優越だと思ったりすべきではない。教える者は最大の優しさ、謙遜、そして謙虚さを持って話すべきである。なぜなら、その様な言論は魂に影響を与え、魂を教育するからである。（アブドル・バハ：「明日への扉」完全版、p.84）

当然、けんか腰の議論も許されない。

> 誰とも議論をするなかれ。そして論争を警戒せよ。真実をはっきりと述べよ。もし汝を聞く者が受け入れるなら，目標は達せられた。もし聞く者が強情であるなら，彼を一人にし，汝の信頼を神に置くべきである。それが，聖約に堅実なる者らの特質である。（アブドル・バハ：「明日への扉」完全版、p.86）

このように、新しい宗教、新しい道徳体系などを導入する場合には、対象となる人々の文化や習慣をよくわきまえた上で伝えていかなくてはならないのである。

しかし他方では、バハオラは、神の新しい啓示について厳格な面のあることも認めておられる。

> わが法律が、わが発言の天から太陽のごとくに現れるときにはいつも、すべての者はそれに忠実に従わらねばならない。たとえ、わが命令が、あらゆる宗教の天界を粉砕してしまうようなものであったとしても。彼は望みのままになしたまう。彼は選びたまう。そして、誰であれ彼の選択に異論を唱えることは許されない。愛されし御方なる彼が定めたもうたことは、何であろうとも、まことに愛されることなのである。これについては、全創造物の主なるお方がわが証人なり。全てに慈悲深きお方の甘い芳香を嗅ぎ、この発言の源を認識した者は、神の法律の真実性を人々の間に確立するために、自らの眼をもって敵の矢を歓迎するであろう。それに向かい、運命を決定する神の法令の意を理解した者は幸いなり。（「ケタベ・アグダス」、第7段）

しかし、実際には同一の啓示の中に累進的啓示があり、神の法は啓示された後も徐々に施行されていく。その証拠として、バハオラの法の書である「ケタベ・アグダス」そのものの英語訳でさえ、教えの体系化を経て 100 年以上経って初めて発行され、その中に収められている法もまだ施行されていないものが多く、それは、社会の状態が変わり、社会がバハイをもっと受け入れるようになってから可能になるとされている。すでに施行されている法は、基本的に精神的な法で、個人の内面的な生活に関するものであり、それは社会の状況に関係なく、個人の選択でできるものであるからである。したがって、事実上は教えが社会に強引に強制されることはないのである。むしろ、バハオラは、心から喜んで、愛の精神で教えに従うことが好ましいと述べておられる。

> 言挙げよ。わが法律からは、わが衣の甘い香りが嗅がれ、そしてその援助により、勝利の旗は、最も高い頂にたてられよう。わが威力の舌は、わが全能なる栄光の天上から、次のような言葉をわが創造物に話しかけた。「わが美を愛するがために、わが命令に従え」と。いかなる舌も描写することのできない恵みの香りに満ちたこれらの言葉から、自身の最愛なる御方の聖なる芳香を吸った愛しき人は幸いである。わが命にかけて。わが恵み深き恩恵の両手から公平の選り抜きの美酒を飲んだ者は、わが創造物の曙の上に輝くわが命令の周りを回るであろう。（「ケタベ・アグダス」、第4段）

軍国主義そして物質主義

キリスト教の伝道が失敗する一方、日本は軍国主義へと走り、大日本帝国を打ち建てるべくアジア太

平洋地域へ進出していく。国際連盟を脱退し、孤立し、同盟国を裏切り、最終的には太平洋戦争の泥沼にのめり込んでいく。そして原子爆弾投下という決定的なダメージを受けて軍国主義からも脱皮していく。この戦争では国教としての神道が誤用・悪用され、敗戦とともに宗教的要素は社会からかますますと一掃されていく。

その後待っていたのは経済活動を通した物質主義である。武器を持っての戦争はもうしない。しかし代わりに、金と物を用いた経済戦争へ突入していく。これは1960年代の奇跡的な経済復興に始まり、1980年代のバブルで最高潮を迎える。「エコノミック・アニマル」と海外諸国から呼ばれるほど、一生懸命に働いた。実際、1960-70年代頃までは日本の製品は三流程度にしか評価されていなかったものが、1980-90年代には世界一流と見なされるほどまで、日本の技術や製品は発達した。

その経済的・科学的・物質的発展そのものは高く評価できよう。しかし、新渡戸が恐れていたとおり、その間、日本は精神的な文明の開発を大部分、怠ってしまった。その反作用として戦後50年の間に宗教ブームが何度か起きている。新興宗教は数多く出現し、その中には数百万、あるいは1千万を超える信者を抱える団体もある。しかしスキャンダルや犯罪に関わる宗教団体もあり、国民の多くは宗教というものに対して懐疑的である。

武士道の復活?

戦後めざましい復活を遂げ、成長した日本経済も、1990年代以降、バブルの崩壊に象徴されるように、翳りを見せ始めている。同時に、人々は、物質的な繁栄だけでは満足できないことに気づき始め、精神性を求めるようになってきている。この風潮を象徴するのが、「古き良き時代」への哀愁である。それは若い世代にも見られ、過去の文芸作品をたしなんだり、お茶や茶道にいそしんだり、あるいは昔ながらの造りの木造住宅を建てたり、そういったものにも現れている。また、数年前にハリウッド映画で「ラスト・サムライ」が放映されたのも拍車をかけ、人々は「侍」や「武道」の精神などに大きな魅力を感じている。実際、映画を見て新渡戸の「武士道」を読みたいと思った人たちも多いようである。

「・・・新道徳が新日本の進路を導かんがため不死鳥のごとくに起こる・・・」とに新渡戸が引用したように、道徳教育に関して試行錯誤している現在の日本社会、日本の教育界は、その方向性を示唆する光明を必要としている。これは明らかである。バハオラは、日本に限らず全世界において新時代が到来したことを告げている。新時代が来たからには新しい価値観、教育、導きが必要である。神の宗教はこのように、新しい時代の到来と共に更新されていく。同じ神から送られてくるものであるが、時代が新しくなれば、宗教も新しくなる。ちょうど人間が小学校・中学校・高校・大学と進学していくように、前の段階の教育が終われば、新しい学校での教育が待っているのである。武士道は、前述のとおり、仏教・神道・儒教という日本そしてアジアの伝統的な宗教を基盤としてできた道徳体系である。それが、新しい時代に神の新しい宗教により受け継がれていくのは道理にかなった流れである。

結論

形式としての武士道はなくなった。刀を持って実践する武士道はなくなった。封建制度も城もなくなった。しかし、武士道の精神は今も日本人の心に生きているようである。日本が「燎原の火」のように燃え上がるというアブドル・バハの予言は、ひょっとすると、その基盤がこの武士道の精神にあるのかもしれない。「武士道は一の独立せる倫理の掟としては消ゆるかも知れない、その力は地上より滅びないであろう・・・その光明その栄光は、これらの廃墟を越えて長く活くるであろう・・・人生を豊富にし、人類を祝福するであろう」(「武士道」。)

引用文献

「明日への扉（完全版）」、尊田望編纂、バハイ出版局、東京、2002年。
アブドル・バハ：「パリのアブドル・バハ講和集」．英語版から邦訳．日本バハイ全国精神行政会監修．東京、バハイ出版局、1976(1959)年．
――：エッセルモント、ジョン「バハオラと新時代」に引用、バハイ出版局、東京、1984年。
バハオラ：「かくされたる言葉」、訳日本バハイ全国精神行政会監修、バハイ出版局、東京。
――：「ケタベ・アグダス」．英語版からの邦訳．日本バハイ全国精神行政会監修、東京、バハイ出版局1993.
――：「バハオラの書簡：『ケタベ・アグダス』後に啓示（上）、東京、バハイ出版局、2003年。
新渡戸稲造：「武士道」。矢内原忠雄訳。東京、岩波書店、2004年。

私とバハイ(習字と音楽の関係から)

津堅伸一

私の成績はというと小学校は、可もなく不可もなくといった平凡な生徒だった。まあまあといったところだろうか。そして中学校に入ると、おちこぼれた。当時、成績の悪いものは私立の商業科の道へ進むのが一般的であった。高校は、それで私立の職業科（商業科）に入学。商業科から大学へ進むものは非常に少なく、大半は高校を卒業すると就職するのだが、努力の甲斐あって、大学へ行けることとなった。

大学のオリエンテーションで教職がとれることを知った私は教職員になる決意をしたのである。子ども好きな私にとって、教師という職業は大変魅力的な職業であり、バハオラも最も賞賛される職業のひとつであると述べておられます。しかし私の前に大きな障壁が立ちはだかったのです。教師になるのなら小学校の先生と決めていたのに、私の大学では中学、高校の教職員免許しか取れなかったのです。私の心の片隅に小学校のときの思い出が残っていたのでしょうか、中学時代や高校時代のほろ苦い記憶と対照的に小学校時代が純粋で平和で輝いていたように感じたのかもしれません。小学校の教職員になるという夢を諦めるわけにはいきませんでした。大学に入学したことで自分に自信がついたのだと思います。すぐに、小学校の教職免許を取るにはどうしたらよいのかと大阪の教育委員会に電話すると助言を頂きました。「卒業してから通信教育で免許をとりなさい。」

中学や高校と違い小学校の教職員免許は全科目を担当することになるので、音楽を学ぶ必要がどうしてもありました。それであるコーラスグループに参加することにしたのです。

思えばこの時からバハイの種は私の心に植え付けられていたのかもしれません。そして、そのメンバーのひとりが、あとからバハイを教えてくれることになるのです。(ただし１５年後)

そして小学校の教員になり、子どもたちと共に人生を歩むことになりました。子どもたちを取り巻く環境は時代と共に厳しくなってきています。個性や人間性を育むことを伝えるためには全力でぶつかっていかなくてはなりません。教師の仕事は真剣勝負です。子どもたちはとても敏感で些細な嘘や妥協も見抜いてしますのです。教師は大きな慈愛で子どもたちを正しく導いていかなくてはなりません。そして、子どもたちに試される出来事が起きたのです！

それは５年生を担当していた頃の出来事でした。習字の授業での一言がきっかけでした。「先生、へたやな～！」

それから、習字を習いはじめました。ゴールは、卒業証書に子どもの名前を書くこと。卒業していく